

〔2〕 日常生活の指導

日常生活は、学校生活の中で毎日ほぼ同じように繰り返す活動であり、登校をはじめ、着替え、係活動、朝の会、おやつ、給食、掃除等がある。児童が一日の生活に見通しを持ってその時々での日常生活の諸活動を自力で処理できるようにすることを目的とし、身辺処理の技能を高めるにとどまらず、日常生活をより自立的・発展的に行うための生活意欲を育てることをねらっている。これらの活動を行うには、子どもと教師の密接なやり取りが不可欠であり、また、教師と子ども、あるいは子ども同士の自然発生的な関わりが生まれやすい場となっている。

(1) 日常生活の指導におけるコミュニケーションの指導

日常生活の指導場面がコミュニケーション指導の場となりやすい理由を次のように考える。

- ・より生活に密着しているため、児童の必然的な要求が出やすい
- ・毎日の繰り返しにより見通しが持ちやすく、児童が自信を持って取り組める
- ・自由な活動場面が多く、児童にとってリラックスしやすい時間である
- ・個別的な指導場面が多くとれ、個に合わせた指導ができる
- ・教師と児童が身近に触れ合う機会が多く、成就感を共に喜ぶ中で共感が深まる

(2) 実践事例

生活に根差した強い要求をもとに発語意欲を育てた例

——給食時間——

自閉的傾向を持つY男（7歳）は、日頃自分から他人に対して関わりを持つことはほとんどなかったが、自分の強い要求は、身振りや叫び声で慣れた人に対しては訴えることがあった。給食時間では、おかわりが欲しいため空の容器を差し出して「ん〜。」という言葉にならない奇声を発するが、その際、担任がY男の気持ちをくみ取りエキスパンション*して「おかわりをください。」とモデルを示し、続けて言わせてからおかわりをさせるようにした。Y男は言葉の便利さに気づき、日々繰り返すうちに、担任がエキスパンションしなくても、不完全ながら言葉でおか



おかわりを求めるY男

(Y男と教師の会話のやり取り)

Y 男	教師
1. (茶碗を差し出しながら) ん〜。	1. どうしたの。
2. ん、ん〜。	2. おかわり？
3. (無言で茶碗をさらに前へ出す。)	3. 「おかわりをください。」(ゆっくりと)
4. ん、くださいー。	4. 「おかわりを」
5. おかわりください。	5. はい、どうぞ。(笑顔でおかわりを渡す。)

わりを訴えるようになっていった。給食以外の場面でも、パターン化した要求語であれば、自発的に自分の思いを伝えられるようになりつつある。

リラックスした雰囲気の中で、教師が意図して自然会話を引き出した例 ——おやつ時間——

小学部では2校時と3校時の間に、少量の食べ物や飲み物を囲んで小休憩するおやつ時間を設定している。短時間であるが、子どもたちの大好きな活動である。小学部2組では、このおやつ時間にリラックスした中で教師が意図的に児童に語りかけ、自然な会話の場を設定するよう心掛けた。連絡ノートで把握した前日の家庭での出来事を話題にしたり、言葉遊びやしりとりをしたりする等、個に合わせた話題や遊びを教師が提示して、児童の自然な会話を促した。普段は自分から語ろうとしないW男やM男も、話しやすい雰囲気の中で他児童の弾む会話に誘われたり、興味ある話題に引かれたりしながら自然な会話のやりとりが見られるようになった。



おやつを囲んで楽しい会話が弾む

おやつ時間の自由会話
(カリントウを食べながら)

- 先生1 「か」のつくものないかな？
W男 「か」？ かに。
先生2 おーっ。Wちゃん今日はさえてるね。
先生1 Sちゃん。「か」のつくもんないか？
S男 カリントウ。
先生1 他にもありませんか？ピオンは？
S男 かえる！
O男 そう、そう。
S男 ピオンはかえるに決まってるでしょ。
みんな ははは…。
O男 ♪かいかいかい…♪
先生2 ほんとうだ。
みんな (うたいはじめる) ♪かいかい…。
先生2 いっぱいでてくるね。
先生1 Wちゃんは？「か」は？
W男 「か」？
先生1 かいがらぶしは？
先生2 歌ってよ！Wくん。
W男 ♪なんの～いんが～で～♪ (かいがらぶしの1番を大きな声で歌う。)
先生2 さすがー。(みんなが拍手)
先生1 他には？
先生2 「かわいそうに」は誰の(劇の)セリフだったっけ。
O男 Mくん。
先生1 言ってみんさいな。
M男 か・わ・い・そ・う・に。(ゆっくりと)
先生2 うん。
S男 ♪とべとべてんまで…♪ (みんなも歌い出す。) …(つづく)

生活の中の問題を担任に訴えて解決させ、生活に安定を持たせた例 ——着替え——

H子(12歳)は、想像力が豊かで言語能力も高く、自由に言葉を使って自分の思いを表現する力を持っているが、積極的に他人と関わることができなかった。そのため日常生活の中で自分で解決できない事が起きると、一人で困ってしまうことが頻繁であった。更衣室に鍵がかかっていて入れない時でも、そのことを誰にも告げず、自分で「もうだめ。」とつぶやいていつまでもドアの前に立って

ることもあった。また、パニックに陥って床にうずくまったり、大声を上げて泣いたりすることもしばしば見られた。そこで、自分一人で出来ない事が起こった場合には、担任にそのことを言葉で訴えるようH子と約束をした。また、一人で困っているような場合は、担任が本児の気持ちをくみ取りながら困っている心情を言語化したり、「～したらどうかな?」と解決の糸口を提示したりすることを心掛けた。そして、H子からの訴えがあれば担任が適切な援助をして、スムーズに解決していけるよう配慮をおこない、問題が解決したら担任とともに喜び、その都度共感を深めていくことを繰り返した。H子は、訴えれば困らなくてすむことが次第にわかり、様々な生活場面で困ったことを教師に話すことにより解決し、落ち着いた活動が増えていった。また、「もうだめ。」と投げやりになっていたことが減り、自分の中で少し考えてから行動したり、「～だからがまんしよう。」と自分に言い聞かせてコントロールするなど、自己内対話を通して自制心が次第に培われてきているように思われる。



担任に話しかけるH子

(H子と教師の会話のやりとり)

H 子	教 師
(更衣室に鍵がかかっていて入れない。)	
1. ねえ、ねえ、ちょっと来てよ。	1. どうしたの?
2. ……。(状況が説明できない。)	2. 何か困ってるの?
3. うん、困ってるのよ。	3. 何に?
4. こっち。(更衣室の前に行く。)	4. どこ?
5. 鍵がかかっちゃってあかないのよ。	5. こうすればあくよ。(鍵をあけてみせる。)
6. うん、ありがと。	

自然な子ども同士の関わりが育った例 ——登校時間——

小学部1組では、新入生を迎えた入学当初は、友だち同士の関わりがあまり見られなかったが、二学期に入って少しずつお互いの行動に関心を持つようになってきた。朝早く登校する児童は、自分の着替えが終わると自由遊びをおこなっているが、自分より後に登校してくる友だちを自然に出迎える児童の姿が見られるようになった。入学当初は非常に自己中心的で友だちとトラブルが絶えなかったA子(7歳)は、面倒見がよく活発なE子(7歳)の行動に誘われて、友だちの出迎えを楽しみにするようになった。A子は、玄関で待ちながらバスの音が聞こえると嬉しそうに身振りで担任に知らせ、門まで駆けてクラスの友だちのY子が降りてくるのを待ち、Y子の手を引いて玄関まで楽しそうに入っ

てくる。子どもたちだけで会話ができるほどの言語能力は、まだどの子にも育っておらず、特にA子は構音障害から発話が困難である。しかし、音声言語だけでなく、その嬉しそうな表情やしっかり握った手から、お互いの心の触れ合いが感じられる一場面である。

(3) 考察と今後の課題

日常生活の指導の時間は、学校生活における身近自立の能力や生活意欲を培うことをねらいとしており、子どもの基本的な生活場面の流れそのものが指導場面となっているので、他の授業づくりのように教師が意

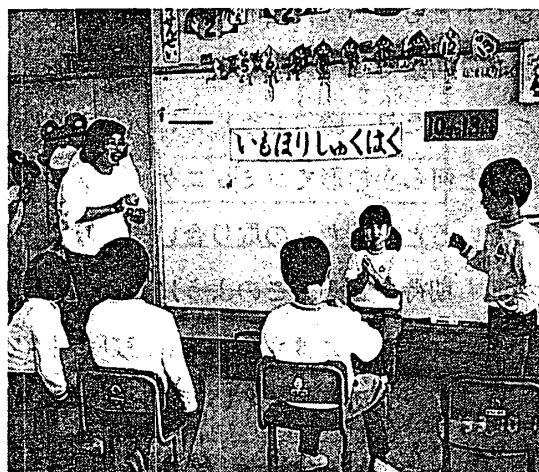
図をもって自由に題材を設定できるものではない。したがって、コミュニケーション指導のみに重点を当ててこの時間の指導目標を設定することは、本来の目的を失ってしまうので気をつけたいが、日常生活の指導の時間が生活に即しているところから、より身近な教師と児童、あるいは子ども同士の自然な関わりの場となることには注目したい。日常生活の目標の徹底のみでなく、そこに教師が一人ひとりの児童に合ったコミュニケーションの指導を組み込んでいくことにより、より豊かな関わり合いが生まれ、それによって児童は共感を広げたり、教師の指示に対する理解を深めたり、さらに生活に楽しさが生まれるなど、本来の日常生活の目標にもさらに近づいていけるものと思われる。そのためには、教師が常に児童個人のコミュニケーションの課題を念頭に置き、様々な生活場で臨機応変にコミュニケーション指導を組み込んでいく柔軟な対応姿勢が必要であると感じる。

本年度の指導を振り返ると、上記に具体的にあげた事例以外にも、朝・帰りの会のパターン化した流れの中で、見通しを持ちながら自信を持って司会活動ができるようになった児童や、登下校時に、ちょっとした教師の言葉の橋渡しで、子どもたち同士が自由に会話をはずませるなど、人との関わりに対して積極性が生まれてきた児童が全体的に増えてきたと感じる。しか

し、教師が日常生活の指導を徹底させようとして、子どもの小さなつぶやきや要求を見落したり、大切なコミュニケーションのチャンスを見逃してしまう場面もまだまだあったように思われる。また、児童の意欲を引き出す前に一方的な声かけをおこなってしまうこともあった。教師が待つ姿勢を忘れず、子どもの思いをくみ取り大切にしていきながら、来年度も日常生活の指導の時間に適切なコミュニケーション指導を組み込んで継続させていきたい。



「おはよう。」今日も遊ぼうね。



朝の会の手遊びはみんなが大好き